

# 前置詞句の項性について\*

浜崎 通世

## 1. はじめに

前置詞句が述語の項となりうるかどうかについて、いくつかの立場が示されてきた。具体例を挙げると、Baker (2003) のように前置詞句が述語の項となりうる可能性を原理的に排除する立場、Neeleman (1997) や Marantz (1984) のように、分析の詳細はそれぞれ異なるものの、動詞が項に対して主題役を与える際の一種の仲介役としての働きを、前置詞に対して与える立場、また次節で取り上げる Williams (1994) のように、前置詞句と照応表現に関わる現象の分析を通して、前置詞句全体に対する主題役付与を仮定する立場などがある。本稿ではこれらの考え方を個別に検討し、よりよい分析の方向性を探ることを目標とする。

## 2. Williams (1994)

Williams (1994:220-221) は以下のようなよく知られた文法性の差について、主題役に着目した説明を提案する。<sup>1</sup>

- (1) a. I talked to Bill about himself.
- b. \*I talked about Bill to himself.

Williams (ibid.) は、(1a) において to の目的語が前置詞句の外にある照応表現 himself を束縛する一方で、(1b) の about の場合にはそれが不可能である理由を、次のように説明する。前置詞 to の場合、それを主要部とする前置詞句が前置詞の目的語の指標を継承するのに対して、前置詞 about の場合には、前置詞自体の指標が継承される。<sup>2</sup>

- (2) a. I talked [to Bill<sub>i</sub>]<sub>PPi</sub> [about himself<sub>i</sub>]  
 (. . . Th<sub>j</sub>, G<sub>i</sub>) (X<sub>j</sub>)  
 b. \*I talked [about Bill<sub>i</sub>]<sub>PPj</sub> [to himself<sub>i</sub>]  
 (. . . Th<sub>j</sub>, G<sub>i</sub>) (X<sub>j</sub>)

前置詞 *to* は「文法的 (grammatical)」前置詞であり、その目的語の指標が前置詞句全体に継承されるのに対して、前置詞 *about* は「意味的 (semantic)」前置詞であり、前置詞自体の指標が前置詞句全体に継承される。その結果、(2a-b) に示されるように、前置詞 *to* の目的語が動詞 *talk* の着点項 (G) と結び付けられるのに対して、前置詞 *about* の目的語は、動詞 *talk* のいかなる項とも結び付けられない。むしろ前置詞 *about* の持つ指標自体が前置詞句へと継承され、その指標が動詞 *talk* の主題項 (Th) に結び付けられることになる。このような前置詞の性質の違いから、(1a-b) に見られるような文法性の差を説明している (ibid.:221)。

こうした説明の中では、*about* の目的語ではなく *about* 自体の指標が動詞の項に結び付けられることになるため、前置詞の目的語ではなく前置詞句自体が、動詞の項として解釈されるということになる。

### 3. Neeleman (1997)

Neeleman (1997) は Baker (1988) で示された「編入」の考え方により、前置詞が関わる主題役付与の問題を説明しようとする。彼は主に、動詞が特定の前置詞を選択する (3) のような例を分析の対象とする。

- (3) John has always believed [<sub>PP</sub> in Bill's honesty]. (Neeleman 1997:89)

(3) において前置詞句 *in Bill's honesty* がどのような意味 (denotation) を持つのか明らかではないため、前置詞句ではなく前置詞の目的語である *Bill's honesty* が、動詞 *believe* と前置詞 *in* との両方から、つまり “to believe in” のようなまとまりによって、主題役を付与される (ibid.:90)。その際、前置詞が LF において、動詞へと編入されるような操作を仮定している。

Neeleman (1997) は編入分析を支持する証拠をいくつか挙げているが、その中の一つとして、動詞が二つ以上の前置詞句補部をとらないことを説明できるとことが示されている。

- (4) a. \*to tell to someone about something
- b. \*to supply to someone with something

(Neeleman 1997:123-124)

非文とされている (4a-b) では、動詞が二つの前置詞句補部をとっている。しかしこれらの動詞がいずれか一方の前置詞句補部のみをとり、もう一方が名詞句として現れている場合には、(5a-b) に見られるように文法的である。

- (5) a. to tell someone about something / to tell something to someone
  - b. to supply someone with something / to supply something to someone
- (ibid.)

前置詞編入分析によれば、動詞が二つの前置詞句補部をとる場合、一つの動詞に対して二つの前置詞が付加される。その結果 (6a) から (6b) の LF 構造が派生される。

- (6) a. [<sub>V</sub> [<sub>V</sub> V PP] PP]
- b. \*[[<sub>V</sub> [<sub>V</sub> [V P<sub>1</sub> V]]] [PP t<sub>1</sub>]][PP t<sub>2</sub>]]

(Neeleman 1997:127)

(6b) では、低い位置にある前置詞句の主要部 P<sub>1</sub> と高い位置にある前置詞句の主要部 P<sub>2</sub> が、この順序で動詞に編入されている。Neeleman (1997) は、(6b) の非適格性が Selkerk (1982) の第一次投射の条件 (the First Order Projection Condition) により、原理的に排除されるとしている。<sup>3</sup>

それに対して問題点としては、冒頭の (1)-(2) に見られるように、動詞が二つの前置詞句補部を取られる例が存在するということが挙げられる。

Neeleman (1997:124-126) は about PP を付加部とし、前置詞編入の対象から除外することによって、この問題に対処しようとしているが、Neeleman 自身が二つ以上の前置詞句補部を動詞がとらない例として挙げる (4a) や (5a) には about PP が含まれていることなど、分析の上で補部と付加部との区別にあいまいな点がみられることが問題となる。

また (7a-b) に示されるような対が、(5a-b) に示されるような対と同様に、前置詞編入によって説明されるべき事例であるとするなら、以下のような点が問題となる。つまり、(7a) の例文における前置詞 onto が、意味上の実質を伴う前置詞と考えられる点である。この例文における前置詞 onto は、(8) の例文によって示唆されるように、複数の前置詞と意味上の対立を成していると考えられる (例文 (7)-(8) は、Goldberg (1995:175) より引用)。

- (7) a. Pat sprayed paint onto the statue.  
b. Pat sprayed the statue with paint.
- (8) Pat sprayed the paint toward the window/over the fence/through the woods.

しかし前置詞 onto が LF において動詞 spray に編入されるとするなら、Neeleman (1997) が前置詞の動詞への編入を認める上での根拠とする以下のような点に対して、問題が生じると考えられる。つまり、例えば (3) のような文において、前置詞句がどのような意味を持つのか明らかではないため、前置詞句ではなく前置詞の目的語に対して、動詞と前置詞の両方から主題役が付与されるという点である。言い換えると、主要部となる前置詞自体に意味上の実質が認められないために、動詞への編入が生じるという点である。

もちろん、(7a-b) のような対が (5a-b) に示されるような対とは性質の異なるものであるために、(5a-b) とは対照的に (7a-b) においては編入が起こっていないとする議論が可能であるかもしれないが、両者がいずれも、動詞が二つの前置詞句補部を同時に取らないという同一の現象であるとするなら、一方に対して前置詞の編入を認め、もう一方に対してそれを認めないとするのでは、両者の共通性に対する十分な説明とはならない恐れがある。

以上のような理由から、編入分析にはいくつかの問題点も残されているた

め、更に検討を要すると考えられる。<sup>4</sup>

#### 4. Marantz (1984) と語彙的例外原理

Neeleman (1997) が分析の出発点とするのは、Marantz (1984) の間接的主題役付与の考え方である。<sup>5</sup> 間接的主題役付与の考え方によれば、以下に示す (9) のような例文において、意味的役割が動詞の項に対して、前置詞を介し間接的に与えられる。

(9) Elmer put the porcupine on the table. (Marantz 1984:19)

動詞 put のとる二つの項のうち、the porcupine に対しては動詞が「主題 (theme)」の役割を与えるが、the table に対しては動詞ではなく前置詞 on が「着点 (goal)」の役割を与えるということである。Marantz (1984) によれば、前置詞を介する「間接的主題役付与」は語彙項目に特別の記載を必要とするため、有標である。無標の場合、項を取る要素はその項に対して直接に意味的役割を与える。

(10) 直接項の原理：無標の場合、項を取る要素はその項に対して、直接に意味的役割を与える。 (Marantz 1984:22)

間接的主題役付与の有標性は、以下の原理による。

(11) 語彙的例外原理：(有標性に対する) 例外は、語彙項目の語彙項目エントリーに、特に記載されなければならない。 (ibid.)

動詞 put の語彙項目エントリーは、以下のように示される (ibid.:18)。

(12) ‘put’ (*theme*, location)

イタリックによって示されるのは直接項であり、述語によって直接的に主題

役を付与される。(12) では **theme** が直接項、**location** が間接項となり、直接項と間接項との区別が、語彙項目エントリーに明記されることとなる。

語彙の例外原理の考え方を推し進めるなら、(3) のような文は、例えば以下のように説明されるであろう。まず動詞 **believe** は、(8) のような語彙項目エントリーを持つ。同エントリーにおいて、**theme** は間接項である。

### (13) ‘believe’ (theme)

動詞 **put** の場合と異なり、動詞 **believe** の場合には更に、**c-selection** において特定の前置詞が要求される。 <sup>6</sup>

### (14) ‘believe’ +[ \_\_ [*in*] ]

動詞 **put** の場合と同様に、(11) の原理によって間接的な主題役付与が語彙項目エントリーに特に記載される点に加えて、動詞 **believe** の場合さらに、範疇選択 (**c-selection**) においても例外的に、(14) に示すように特定の語彙項目が要求される点で、さらに高い有標性を伴うことになる。

以上のような考え方の中では、二つ以上の前置詞句補部が生じないことに対する説明は、以下になるだろう。つまり、一つの動詞に対して二つ以上の特定の前置詞を、(14) のような範疇選択により指定することが、より一層の有標性を伴うため、そうした現象自体が生じにくい、ということである。それに対して前節で紹介した **Neeleman** の前置詞編入分析は、特別な前置詞が二度以上指定されないことに対して、語彙的な例外事項としてではなく、より統語的な操作に基づいた説明を試みていることになるが、ありうる問題点については浜崎 (2009) の他、前節で論じた通りである。

## 5. Baker (2003)

Baker (2003) は語彙範疇の持つ [ $\pm$ N,  $\pm$ V] の素性に実質的な内容を与え、[+N] が「指示指標」を持つ範疇、また [+V] が指定辞を持つ範疇とした上で、名詞が前者に、動詞が後者に該当するとしている。形容詞はそのどちらにも

該当しないため、[-N, -V] と定義される。なお前置詞は、これらの素性によって定義される諸範疇とは別の体系に属するため、機能範疇であるとされている。

(15) Noun is +N = 'has a referential index'

Verb is +V = 'has a specifier'

Adjective is -N, -V

Preposition is part of a different system (functional)

(Baker 2003:21)

また指示指標を有することは、名詞が「同一性の基準 (criteria of identity)」を有することの帰結であるとしている (Baker 2003:96)。「同一性の基準」とは、二つの対象物が同じものであるかどうかを問いうるか否かということであり、名詞以外の範疇、例えば前置詞の意味は、典型的な場合、何らかの対象物に対して相対的に定義されるため、特定の対象物を離れて絶対的な意味で、二つの同じ「前」、あるいは「後」といった指示対象を、想定することは出来ないと考えられる。つまり前置詞は「同一性の基準」を有さないため、指示指標を持ちえないということである。Baker (2003:145) にしたがって、指示指標が述語の主題役と結びつくことによって項として解釈されるなら、前置詞が指示指標を持たないためにその投射となる前置詞句も指示指標を持たず、結果として前置詞句は項となりえないことが導かれる。

## 6. 前置詞句への主題役付与について

以上、次のような四つの立場について説明した。すなわち、1) 前置詞句への主題役付与、2) 動詞への前置詞の編入、3) 動詞の項に対する主題役付与子としての前置詞、4) 前置詞句への主題役付与を原理的に排除すること、の四つである。こうした立場のうち、2) から 4) のような可能性を追求することも重要な課題であるが、以下では特に 1) の可能性に焦点を絞って、若干の議論を行う。ただし、前置詞句の下位類のうち全てを扱うのではなく、put 類の動詞がとる前置詞句など、特に場所の意味を表す前置詞句に

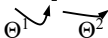
ついて検討することにする。<sup>7</sup>

場所を表す前置詞句に対して主題役付与が仮定されてきた理由としては、以下のようなものがある。例えば動詞 *put* のとる前置詞句は、(16) に示すようにその主要部として複数の前置詞が可能であり、また (17) に示すように前置詞句全体を代用表現によって置き換えることが可能である。

- (16) Elmer put the porcupine in the box/on the table/under the hedge, etc.  
(Marantz 1984:32)

- (17) a. Irving put the books [on the shelf]/there/away.  
b. Sheila put the clothes [in the closet]/inside/on.  
(Jackendoff 1973:346, cited in Hestvik 1991:481)

動詞 *put* の補部となる前置詞句は、こうした理由から独立の意味的単位であると考えられ、例えば Hestvik (1991:475) は次のように分析する。

- (18) [s NP [<sub>VP</sub> V [<sub>PP</sub> P NP ]]]  


上図において V は PP に主題役を与え、主要部の P は目的語の NP に主題役を与える。つまり前置詞句自体も何らかの意味を有するため、主題役の受け手になるということである。<sup>8</sup>

Baker (1988:242) は、*put* 類など場所を表す前置詞句を選択する動詞について、前置詞がその目的語に対して主題役を付与し、その結果生じた前置詞句全体が動詞によって主題役を付与されるとしている。したがってやはり、(18) に示されるような主題役付与のプロセスを仮定していることになる。例えば (19a-c) のような例において、前置詞 *in* の目的語に与えられる主題役はそれぞれ、動詞によって異なっている。

- (19) a. Camel went in the room. <path>  
b. Camel sat in the room. <locative>



c. Camel ran in the room. <path/locative> (Baker 1988:241)

Baker (1988) によると、前置詞 in は (19a-c) のいずれの例文においても、名詞句 the room によって言及された対象物に対して特定の空間を定める。さらに動詞が解釈の可能性を一層狭めることにより、the room の意味的な役割が決定される。<sup>9</sup>

Baker 自身は前述の著書において ((Baker 2003))、前置詞が「同一性の基準」を満たさないため、前置詞句が項となる可能性を原理的に排除し、put 類の動詞がとる前置詞句を付加部として分析している (ibid.:320)。しかし一方で、(20) のように場所を表す関係名詞 (relational noun) が前置詞の目的語として用いられる例を取り上げ、英語の一般の前置詞についても、語彙挿入の前に関係名詞が抽象的な前置詞と融合 (conflation) している可能性を指摘する。

(20) I put the letter on top of the book. (ibid.:305)

関係名詞の抽象的な前置詞との融合が、具体的にどのようなものか明記されていないが、例えば (21) のような文における前置詞句 on the desk の構造を、(22) のように仮定する。<sup>10</sup>

(21) I put the letter on the desk.

(22) [PP P [NP RN (relational noun) [PP (of) [NP the desk ]]]]  
                                └──┬──┘  
                                conflation

そうすると前置詞句全体への主題役付与とは、関係名詞が P へと融合、あるいは付加された結果、その指標が P また PP 全体へと継承され、この PP に対して主題役が付与されることになる。<sup>11</sup>

(23) [PP<sub>i</sub> [P<sub>i</sub> P RN<sub>i</sub>] [NP t<sub>i</sub> [PP (of) [NP the desk ]]]]

この指標は関係名詞に由来するため、その性質上、「同一性の基準」を満たさないと考えられる。つまり (15) に示された意味での指示指標ではないということである。<sup>12</sup>

浜崎 (2009) では、前置詞が「同一性の基準」を満たさないにせよ、何らかの対象物に対して相対的に定義される意味を有するため、主題役付与の対象になりうると結論付けた。関連して、Baker (2003:324, fn. 13) において補文標識の *that* を主要部とする CP が「何らかの種類の指示指標を持つ (*they have some kind of referential index*)」とされ、*that* が指示指標を伴う機能範疇であると示唆されている点に対し、<sup>13</sup> 主要部の *that* が名詞と同じ意味で同一性の基準を満たすとは考えにくく、項として解釈される言語要素に対して「同一性の基準」のような厳しい意味上の制約を設けることに不自然な一般化が伴うことを、前置詞の場合と同様に示しているのではないかと指摘した。また文法範疇のいわば「項性」が、もっと意味的な要因から独立した文法的な概念である可能性を示唆した。

補文標識に関して付け加えると、Bresnan (1979) は *that* を *definitizer* とする一方で、同じ補文標識でも *wh* を伴う補文標識は *undeterminer*、また *for* は *intentional/motivational* であるとしている。<sup>14</sup> これら三種類の補文標識を主要部とする CP がいずれも述語の項となりうるなら、Baker (2003) の「同一性の基準」を保持するためには、これら三種類の補文標識のどのような意味上の共通点によって、それらが指示的と言いうるのかについて議論が必要であると考えられる。

## 7. 結び

本稿では、前置詞が関係する主題役付与をめぐる問題について、Williams (1994)、Marantz (1984)、Neeleman (1997)、Baker (1988, 2003) らの分析を取り上げ、前置詞句全体への主題役付与の可能性について論じた。前置詞句全体への主題役付与にとって、前置詞の意味が Baker (2003) における「同一性の基準」を有さないため、前置詞またそれを主要部とする前置詞句が指示指標を持たず、したがって述語の項となれない点が問題となる。しかし、Baker 自身が指示指標を伴う可能性を示唆する補文標識についても、「同一性の基準」

に関して議論の余地があると考えられる。例えば、補文標識 *that* や *wh* を伴う補文標識、また *for* といった要素について、どのような意味上の共通性があるために、それらが指示的と言いうのかといった点である。

以上のような事情を考慮した上で、本稿では、文法範疇の「項性」が、もっと意味的な要因から独立した文法的な概念である可能性を示唆した。

## 注

1. Williams (1989) も参照。
2. より正確には、前置詞の外項の指標である。例文 (2a-b) において、X に付された指標 *j* がそれにあたる。
3. 詳細については Neeleman (1997) を参照。
4. 前置詞が語彙範疇であるか機能範疇であるかという問題にも関連するが、もし前置詞が機能範疇であるとするなら、前置詞の動詞への編入は、Baker (2003:306) による以下の一般化にも反することになる。  
(i) 適正な主要部移動に関する一般化 (The Proper Head Movement Generalization (PHMG)) : 機能範疇から語彙範疇への移動は不可能である。  
Baker (2003:322, fn. 11) はこの一般化から、Neeleman (1997) の前置詞編入分析をとらない立場を示している。
5. 間接的主題役付与 (Indirect  $\Theta$ -Role Assignment) という用語そのものは、Neeleman (1997:99) によるものである。
6. 範疇選択とイディオム化 (idiomatization) との関係についての、Baltin (1989:6) での議論を参照。そこで示唆されているように、範疇選択において特定の語彙項目が選択されることがイディオム化であるなら、動詞による特定の前置詞の選択もまた、イディオム化の一種と考えられる。(14) の表記は、同文献を参考にしている。
7. 様々なタイプの前置詞句と主題役付与との関連については、たとえば Hestvik (1991) での議論も参照。
8. こうした前置詞句全体に対する主題役付与を、(1) に示したような例文におけ

る about PP や to PP に対しても適用する可能性については、浜崎 (2009) を参照。

9. 以下の (i)-(ii) の引用を参照。

- (i) “In each case, the actual range of readings is determined by the verb, even though the preposition *in* makes a semantic contribution that is common to all of these cases by defining a particular space relative to the object mentioned by its complement *the room*.” (Baker 1988:241)
- (ii) “... the P determines a certain range of interpretations that the NP can have, and the V then further limits that range. Now theta role assignment is supposedly a formal grammaticalization of compositional semantic dependencies. Therefore, it seems that these semantic facts indicate that in benefactives, instrumentals, and some locatives, the P theta-marks the NP and the V theta-marks the resulting PP. (ibid. 242)

なお本文中の「名詞句 *the room* によって言及された対象物に対して」定められる「特定の空間」とは、例えば Quirk et al. (1985:674, 676) の用語を借りると、“enclosed area of the room.” ということになるであろう。

- 10. 関係名詞の文法範疇について Svenonius (2006) は、N とは別の AxPart であると論じる。関係名詞の文法的な性質についての検討は、別の機会に譲りたい。
- 11. ゼロレベルの要素 A に対して別のゼロレベルの要素 B が付加される際に、B の持つ指標が A に継承される点については、Hale and Keyser (1993:59) を参照。
- 12. その場合、主題役付与に供される指標について Baker (2003) によるものとは別の定義を示す必要があるが、その点については今後の課題である。
- 13. Baker (2003:325) を参照。
- 14. それぞれ以下の記述を参照。

- (i) The function of *that* is to “definitize” a complement ... (Bresnan 1979:70)
- (ii) The characterization of *WH* as an “undeterminer” suggests why *WH*-complements occur with intrinsically interrogative and dubitative predicates ... (ibid.:67)
- (iii) I will tentatively refer to this basic meaning as “intentional” or “motivational”, terms which are meant to express at once the subjectivity and the directionality of *for*. (ibid.:82)

なお definitizer という用語は、Bresnan (1979:71) によるものである。

## 引用文献

- Baker, Mark. 1988. *Incorporation: A theory of grammatical function changing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Baker, Mark. 2003. *Lexical categories: verbs, nouns, and adjectives*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Baltin, Mark. 1989. Heads and projections. In *Alternative conceptions of phrase structure*, ed. by Mark R. Baltin and Anthony S. Kroch, 1-16.
- Bresnan, Joan. 1979. *Theory of complementation in English syntax*. Garland: New York.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hale, Kenneth and Samuel Jay Keyser. 1993. On argument structure and the lexical expression of syntactic relations. In *The view from building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 55-109. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 浜崎通世. 2009. 「前置詞句と間接の主題役付与」. 『英文学研究支部統合号』第2巻:365-373.
- Hestvik, Arild. 1991. Subjectless binding domains. *Natural Language and Linguistic Theory* 9:455-497.
- Jackendoff, Ray. 1973. The base rules for prepositional phrases. In *A festschrift for Morris Halle*, ed. by Stephen R. Anderson and Paul Kiparsky, 345-356. New York: Holt, Reinhart and Winston.
- Marantz, Alec. 1984. *On the nature of grammatical relations*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Neeleman, Ad. 1997. PP-complements. *Natural Language and Linguistic Theory* 15:89-137.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. New York: Longman.
- Selkirk, Elisabeth. 1982. *The syntax of words*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Svenonius, Peter. 2006. The emergence of axial parts. *Nordlyd: Tromsø Working Papers in*

*Linguistics* 33.1, 49-77. <https://munin.uit.no/handle/10037/1877>.

Williams, Edwin. 1989. The anaphoric nature of  $\theta$ -roles. *Linguistic Inquiry* 20:425-456.

Williams, Edwin. 1994. *Thematic structure in syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

\*本学に赴任当初より、長年にわたり同じ英語学分野の先輩としてご指導をいただいた小泉直先生に、心より御礼申し上げます。